

## 『ろばの影裁判』

—原作と翻案の間—

中川 勇 治

現代作家の手になる古典の改作、あるいは翻案はきわめて少ないが、それでも稀に試みられる例を見ると、広い意味での古典の受容という観点からは、なかなか興味深いものがある。改作という具体的な形を通して、古典の意味内容が、原典そのものよりも、一段と鮮明に浮き出してくることもあるし、あらためて、現代とは何かを問い直す契機をもたらすこともある。東ドイツの作家 Ulrich Plenzdorf が1970年に発表した『若き W. の新たな悩み』などは、そうした例の一つであろう。それを決定的な現代版『ウェルテル』であると評価すべき根拠はないが、Jerome D. Salinger の例のように、十代の若者のスラングを駆使しつつ、東ドイツの現実の中で、ウェルテル的状况に陥った若者の彷徨、そして、少なくとも表向きには、事故死という形で若者の満たされざる人生を提示して20世紀後半における一つのウェルテル像をつくり出していることは否定できない。読者はゲーテの「ウェルテル」が生きた時代的狀況とこの若き W. のそれとを比較し、はたして現代はゲーテの時代と本質的に異なるのだろうかという疑惑にとらわれてしまう。いったい時代的な懸隔は、人間の存在感覚を決定的に変えるのであろうか、それとも単に物質的、社会的な条件を変化させるだけで、存在感覚そのものにはなんら本質的変革をもたらさないであろうか。

このような疑問をさらに深める例として、現代スイスの重要なドイツ語作家 Friedrich Dürrenmatt が1951年に発表したラジオ・ドラマ “Der Prozeß um des Esels Schatten” を挙げるができる。これは標題ばかりか、その標題に付せられた但し書きが明示するように、18世紀ドイツの作家 Christoph Martin Wieland (1733—1813) が1781年に完成した諷刺小説

“Geschichte der Abderiten”の第四巻を翻案したもので、Plenzdorfの場合とは異なり、基本的には話の筋も登場人物も、ほとんど Wieland に借りている。元来、この小説は古代ギリシャの都市国家 Abdera に舞台を借りて、18世紀後半のドイツで Wieland 自身が観察した小市民たちの頑迷固陋で夜郎自大な俗物根性を徹底的に揶揄し諷刺したもので、ゲーテを始め多くの人々の絶賛を拍し、Abdera と Abderiten という言葉が直ちに俗物の町、俗物的市民を意味するようになったほどの大成功を収めた。Dürrenmatt が翻案した第四巻は、その内的な完結性、ほとんど劇的といえるくらいの緊迫した内容という点でそれ以前の社会パノラマ風な各巻とかなり性質を異にするが、さらに諷刺そのものが18世紀のドイツ社会に局限されず、現代社会の党派的抗争についても充分あてはまるほど、批判の鋭さを失っていない。おそらく、この後の理由もあって Dürrenmatt はこの巻を題材としたのであろう。それはともかく、20世紀独特のジャンルに移し変えられた『ろばの影裁判』は放送の度ごとに実に烈しい論争を惹き起したと伝えられる。Dürrenmatt 研究家の Elisabeth Brock-Sulzer は、こうした聴取者の反応を、どれほど形骸化しようとも、あくまで神聖な価値とされるものに固執する人々がまだ多過ぎるからだ、と評している。とすると、このラジオ・ドラマに反発を覚えた聴取者が直ちに現代の Abderiten であるとはいわないが、少なくとも彼らがこの作品の中に自分たちへの批判あるいは挑戦を感じたことは間違いない。とはいえ原作と翻案を隔てる170年の歳月が人間の存在感覚になら作用を及ぼさなかったかどうかは、Dürrenmatt の作品自体を検討しなければ答えようがない。そもそも翻案は原作の引き写しではなく、責任ある自覚せる作家が、はっきりした目的意識をもって、原作を契機としながら新しく創作した結果である。しかもこのラジオ・ドラマに関しては、作者自身が但し書きとして、(nach Wieland—aber nicht sehr) という一句を記しているだけに、彼の自立性の要求を正当に扱い、その自立性がどのように構築されているかを探り出す必要がある。その上であらためて先の問いを持ち出すこともできるし、聴取者の一部が何故この作品を非難したかを理解する道も開かれよう。

まず小説とラジオ・ドラマが題材としている事件をごく掻い摘んで述べておく。

アプデラの歯医者 Struthion は、夏のある日、診療のためゲラニアという町まで出掛けることになったが、自分のろばが出産のため使えず、やむをえず市内のろば追い Anthrax のろばを借りて出発した。歯医者はろばに乗り、ろば追いは到着地からろばを連れ戻すため徒歩で同行した。道中、炎暑の耐えがなくなった歯医者は、周囲に何一つ日陰となる物がないため、ろばから降りて、そのろばの影に腰をおろした。それを見たろば追いは、ろばは貸したが、その影まで貸した覚えはない、どうしても影を利用したいならその料金を支払えと要求する。意外な抗議に驚いた借り主の方は、影はろばについてまわるもので、ろばを借りた以上は影も借りたことになる、だから借りた者は、ろばの影を何度でもいくらでも自由に利用できるのだ、影の代金を支払うほど馬鹿ではないとやり返した。ここから二人の言い合いは激化し、とどのつまり、アプデラへ引き返えし、市の裁判官 Philippides に訴え出ることになった。ろばの借り主に影の使用権があるのか、それとも持ち主の所有権は影にまで及ぶのかという前代未聞の問題を持ち込まれた裁判官は、判断に困惑したが、時間をかけてなんとか両人を説得し、和解寸前に漕ぎつける。ところが折悪しく、その場へ弁護士 Physignatus と Polyphonus が現われ、恰好の獲物とばかりに二人の争いに介入し、せっかく一旦は消滅するかに見えた二人の敵意が再燃してしまう。このため両人の論争は正式に裁判によって決着がつけられることになり、Physignatus は歯医者を、Polyphonus はろば追いをそれぞれ弁護するという手筈が整えられた。しかし、この珍妙きわまる裁判は当事者間の私的な争いには留まらず、周囲の人々を捲き込んで次第にふくれあがってゆく。歯医者とろば追いがそれぞれにアプデラの有力者の支持を求めた結果、両人を名目上の核とする党派が形成され、やがてこの共和国の宗教界を二分する実力者、すなわち蛙を聖なる動物として信仰する Latonentempel の司教 Strobylus、それに対抗する Tempel des Jason の首席司祭 Agathyrus の二人が、それぞれの党派の実質的指導者として登場すると、アプデラ共和国は真っ二つに分裂する。二人の指導者が自分の人望や影響力を利用して市議会

員から庶民に至る市民の全階層に働きかけた結果、市民はいずれかの党派に所属し、中立を守る者は皆無となる。歯医者 of 党派は「影の党」、ろば追いの党派は「ろば党」と呼ばれ、日常生活の細部にいたるまで党派の別が至上の問題とされるほどになった。このようにして、アプデラ共和国の市民の間には、反感、敵意、嫉視、憎悪が渦巻き、ろばの影は誰のものかという裁判の判決を目指して争闘のエネルギーが高まってゆく。判決の日、何が起こるかは、小説とラジオ・ドラマではそれぞれ異なるが、ともあれ、実体のない患者の争い（ドイツ語では、ろば [Esel] は馬鹿者、影 [Schatten] は中身のないものというニュアンスがある）が一つの社会全体を根底から揺るがす次第が、二つの作品の内容をなしている。

さて、このような珍妙きわまる事件を描くに当たり、Dürrenmattは原作の小説にどのような改作のメスを入れ、Wieland からどのように離れていっただろうか。

まず第一に、人間の肉声を主体として時間の流れの中に表現の完成を目指すラジオ・ドラマというジャンルの要求に応じて、小説の中に描き出された、いわば冗漫な紆余曲折する事件の動きを徹底的に圧縮し、一切の枝葉末節を省略し、アプデラ市民の痴愚を明確な一本の線に取りまとめた点が挙げられる。具体的に言えば、小説では裁判の動きが、第一審でのろば追い側の敗訴、それを不服とする Polyphonus の大評議会への上告、その上告の適否をめぐる市議会での論争、そして大評議会における両弁護人の対決と判決を迫られた評議会の混乱といった順序で進んでゆくが、ラジオ・ドラマの場合は、それが唯一回の法廷場面に絞られ、十人の裁判官の票決は五対五となって判決が下されず、法廷における当事者間の殴り合い、大乱闘となって終る。また人物の配置や役割も整理され—もちろん、Dürrenmatt の目的意識に従ってだろうが—ろば追い Anthrax は貧民として、主として庶民が信仰するラトナ寺院の管轄区域に居住する者とされ、司教 Strobylus の庇護を受けることになる。そのため歯医者 Struthion は富裕な階層の帰依するヤーゾン寺院の側に配置される。このようにして、貧困者層対富裕者層の図式が新たにつくり出され、

Wieland の入り組んだ人物配置や勢力分野とは異なる意味が生じてくる。この新しい図式にふさわしく、人物の関係にも変化が生じ、夜分ひそかに踊り子を寺院内に引き入れて、エロチックな興味を満足させるのが Strobylus となるし、小説ではこの踊り子に代わってヤーゾン寺院の首席司祭 Agathysus の寵愛を受けることになるろば追いの娘 Gorgo は、ごくあっさり女奴隷として売られてしまう。それは、あるいは、貧民の娘よりも、流れ者の手練手管にたけた踊り子のほうが、高位聖職者を誘惑するには効果的と判断されたためかもしれない。しかし、人物の関係でもっと深い意味をもつと思われることは、小説では二派の争いを決定的に左右した Strobylus 対 Agathysus の抗争がラジオ・ドラマではあまり表面に押し出されず、その前半部分は、貧民 Anthrax が庶民同士のつながりをたぐって、Strobylus の支持を得ようと策動する過程が中心になっていることである。つまり有力者間の確執よりは、生活の苦勞に喘ぐ一般大衆の側から事件の進行を支えるのである。この力点の移動によって、Wieland の小説では事件の進行をもっとも強力に支配する要素として取り上げられた宗教界の権力抗争の意味が著しく低下する。これは二つの作品が、その叙述方向でもっとも大きく隔たる点かもしれない。Wieland が『アプデラの人々』を語り進んで第四巻に達した時、それまでの明朗で穏やかな対話調を離れ、冷静な報告調に転じたことは、あるいは執筆期間の永さによってアプデラ人に対する考え方に変化が生じたためかもしれないが、この巻と次の第五巻がいずれも、狂信の心理 (Psychologie des religiösen Wahns) を内容としているだけに、それを集中的に叙述する必要を感じた故ではないだろうか。つまり、第一巻から第三巻までのように、いわば罪のない愚行や奇行を愉快地に、そしてイロニーの衣に包んで語るができないほど、宗教に毒された人間生活を深刻な問題として捉えているためではなからうか。事実、Wieland のように寛容な語り手としては珍しく鋭く辛辣な筆致が、ラトナ寺院の司教 Strobylus の性格描写にうかがわれるし、第六章のほとんどがラトナ寺院とヤーゾン寺院の確執を説明し、その頭領たちの人柄を素描するのに使われている。たとえば、ラトナ寺院の司教についてはば次のような性格描写

が行なわれている。大衆の前で自分を賢明な、誤りを犯さぬ人物と見せかけるには、いつも洪面を作り、重々しい振舞いをするのが一番だと思っている男。哲学を憎悪するふりをするが、それは本来自分より頭がよく、知識も広い人に対して頭の悪い者が持つ怨みを覆い隠す仮面にすぎない。物事の判断は曲がって一面的、自分の意見にはどこまでも固執する我利我利亡者で、他人の考えに反駁するときは粗暴で狂熱的となり、自分自身か、ラトナの蛙が侮辱されたと思ひ込むと恐しく復讐心が強い。そのくせ、自分が大切だと思う物事が、自分の憎んでいる人物の助けを借りなければ実現できないとなると、ひどく柔軟になる。おまけに、適当に金銭を提供しさえすれば、どんなことでも平気でやってのけるという噂もまんざら根拠がないわけではない。この小説全体で Wieland がこれほど酷評した人物は他にいない。作者が作中人物を非難するわけではないから、これはもっぱら Strobylus の代表する狂信的なラトナ神への批判と見てよいだろう。やや脇道へ逸れたようだが、要するに、宗教による人間支配が小説では叙述の中心であるのに、ラジオ・ドラマではそれがあまり問題にされていないことを指摘したいのである。先に挙げた人間関係の新しい図式は、裁判の当事者の動きを誤解のない明確な線に統一するための手段にすぎず、事件全体を解明する唯一の鍵というわけではない。

次に、ラジオ・ドラマに登場する人物たちは、Wieland の小説におけるイロニーと寛容をもって説明する語り手という手段が欠如しているため、いずれも一様に、自分の思い込みから脱け出せず、否定的な側面をさらけ出すばかりである。換言すれば、彼らの発言には、なんらのユーモア、なんらの楽しさもなく、口をついて出てくる言葉は、不満、後悔、思いあがり、ひがみ、無気力、傲慢、あきらめ、軽薄、愚鈍などを裏書きするものばかりである。歯医者 Struthion は、原則を貫くためには、いかなる犠牲も大きすぎることはないなどと大言壮語しながら、自分自身の立場さえわからず、妻が他の男たちと関係していることも知らない。しかもすべてを失ってから、相変らず自分の無実を執拗に主張し、自らの愚かしさを悟らない。その喧嘩相手のろぼ追い Anthrax は、酒飲みで毎日のように女房を殴りつけるような無知な男だが、そのくせ自

分は愛国者で信心深いなどと誇らしげに言い、弁護士にとらぬ狸の皮算用式の話を持ちかけられるとすっかり有頂天になり、弁護士費用を払うため、家具やベッドまで質入れする。そして最後には、娘を奴隷に売りとばし、女房を他家に奉公させるような羽目に陥る。市の裁判官 Philippides はなんの判断力も実行力もなく、自分の許に持ち込まれた係争事件は、黒白をつけずに和解させるのが一番だと考える無能裁判官にすぎないし、他人の争いを喰い物にする弁護士たち一本は三百代言といった方が適切な存在、事実、Wieland は Sykophanten（法律をねじ曲げる者）という語を用いている—は、口では法を護るとか、民衆の求める新しい法の原則を確立するために努力するなど美辞麗句を並べながら、弁護士料だけは厳しく取り立てるような連中である。Anthrax の妻 Krobyle は、貧困と夫の虐待に甘んじているうちに、すっかり生活の希望を失った女であるが、世の中の裏道をわたってゆく術は心得ており、単純な夫に入れ知恵して Strobylus の庇護を受ける段取りまでする。最後に、いわば夫に売られて女中奉行に出るのは一抹の哀れをとどめる。彼女の友人である婦人帽つくりの女工 Peleias は、言い寄る二人の男を両天秤にかけているし、その男たちの一人 Mastax は甲冑製造をやって一儲けを企む軽薄な男で、自分の商売ほど平和的なものはないなどと放言している。その兄の船長 Tiphys は、この作品に登場する人物のうちで、人間性をもっとも侮辱する男であり、金のためなら人殺しも放火も平気でやってのけ、港々で酒と女に明け暮れている。彼は人間の理想や信念を一切認めないが、人間の理念の争いの背後には私利私欲の潜んでいることを見抜いており、アブデラ市民の争いが虚偽の宗教によって惹き起こされたことをはっきり認識している。人間の虚偽の世界に絶望し切って、一切の拘束を拒否するこの男は、ある意味で、もっとも純粹な生き方をしているとも言えるし、この作品の中では唯一のふしぎな魅力をもった存在である。彼の婚約者となっている小間使の Iris は単純でセンチメンタルな女にすぎず、その女主人の踊り子 Telesia はメガラ郊外のキャバレーで働いていたが、アブデラへ移ってからは、市立劇場のソロダンサーに出世し、Strobylus に可愛がられて贅沢で淫蕩な生活を送っている。その相手の

司教 Strobylus は、一見貧乏人の味方というポーズをとるが、内面は金銭欲や色欲のかたまりにすぎず、もっともらしく学術研究と称しながら、Telesiaの裸体鑑賞にうつつを抜かしている。その敵対者の首席司祭 Agathyrus はヤーゾン寺院の支配者でありながら、一向に信仰心がなく、Strobylus を軽蔑するのみ。彼も Struthion の妻と関係がある。

以上は、いずれも本人の発言を中心に登場人物を寸描したものであるが、積極的評価に耐える者が皆無で、そこには、ジャンルの故ばかりでなく、明らかに作者 Dürrenmatt の意志が働いていると思われる。もちろん、Wieland の小説にも賞賛に値するような人物は描かれていないが、少なくともヤーゾン寺院の首席司祭はややましな取り扱いを受け、明朗闊達で豪気な性格、芸術を愛好し、才能ある人士との交際を好む点は、女性関係の奔放さというマイナス面と並べて公平に描写の中へ取り込まれている。総じて小説のほうでは、人々の愚かな行動が揶揄され笑われるだけで、厳しい批判、あるいは辛辣な非難に曝されることはない。従って Dürrenmatt が登場人物すべてを否定的な灰色のタッチで表現したことは、事件の動きを徹底的に一本の明確な線に統一したとことと表裏一体をなすもので、Wieland がユーモアやイロニーの衣で覆い隠している人間の現実の姿をはっきり白日の下へ引き出そうとする意志の現われであろう。またこの意志は単に人物描写（ラジオ・ドラマにおける登場人物の発言をそう言ってよければの話であるが）に留まらず、人々の発言内容にも作用を及ぼしているようである。たとえば、法廷の場面で論告求刑のため専門鑑定を述べた判事補 Miltias は、ろば追い Anthrax の敗訴を提案したため、早速、弁護士の Polyphonus によって個人攻撃を受ける。この弁護士は次のようにずばりと言う。「旧家出身のミルティアスに質問する。昨日深夜、12時から1時まで歯医者ストルティオンの妻クロエーは何のために貴方を訪問したのであるか、返答しなさい。皆さん、御覧の通り、ミルティアスは顔を赤らめ、歯医者は手で顔を覆っております。おお、なんという悪い時代か、おお、なんという乱れた風習か。しかし、アプデラの先頭に立ち、アプデラ精神の頂点をなし、アプデラの伝統の精髓とされる人物自ら、乱れた不義密通に狂っている



今、いかにして都市貴族ミルティアスが行い正しく出来るでありませんや。裁判官の皆様、私が申し上げているのは、首席司祭アガティルズスのことです(原書152, 153ページ)。こうした名指しの糾弾に比べて、Wielandにおける表現は、報告体の文章ということもあるが控え目な印象を与える。「ストルティオン夫人は、彼女の階層では美女の一人と目されているが、自ら彼の許へ出かけ何度か夫の正しさを訴えたということも、ずい分声高に話題とされた」(原書212ページ)とか、「あるいは彼の失敗の言い訳になるかもしれないが、彼は昨夜大宴会に出席して時間を過ごし、さらに帰宅してからは、ストルティオン夫人とかなり長時間にわたって会見せざるを得なかった、というわけで多分——十分に眠られなかったのだろう」(原書216ページ)という暗示的な言い方になっている。Polyphonusの短刀直入な表現とWielandの婉曲かつイローニシュな表現は、明らかに同じ事柄を指しているのであるが、読んだ場合の印象には実に大きな違いがあり、直截に述べられた言葉の強圧的な威力が読者の想像力を完全に麻痺させるのに対し、遠まわしに、しかも話の全体を見通しながら、語り手が自由に裁量した報告体の文章には、読者をして想像の領域に遊ばせる余裕がある。このような対照性は、あらためて文体の持つ意味を考えさせるが、この場では深入りしないことにする。ともあれ、Dürrenmattのラジオ・ドラマでは、二人の弁護士の応酬は相手側の策謀を曝露することに尽き、当事者間を仲介する試みは一切行なわない。Miltiasの論告に関する票決が賛否同数で、裁判という方法では決着のつかないことが暗示され、法廷で起こった大乱闘はやがて来たるべき破局の先取りとなる。とすると、これまでに見てきたDürrenmattのやり方はアプデラ共和国の崩壊を導き出すための準備であったと言えないこともない。事件の動きを一体化して他からの干渉の余地をなくし、人物をその線に添って配置し、さらにその人物を否定的側面から描き出し、妥協の可能性を排除してしまえば、最後はむき出しの力対力の衝突である。

Dürrenmattがラジオ・ドラマの中で「ろばの影裁判」を締め括ったやり方は、単に Wieland の小説の結末と著しい対照をなすばかりか、作品全体の解釈を根本的に規定する重みを持っている。すなわち、原作の場合には、大評議会に蟄集した人々の面前に問題のろばが引き出され、人々の憤懣の排け口となって粉々に引き裂かれ、党派争いのエネルギーを吸い上げ、人々は争いを忘れ、アプデラ共和国は再び平和をとり戻すという形で事件の解決がつく。ラジオ・ドラマでは、「ろば党」と「影の党」がそれぞれに船長 Tiphys の手を借りて、敵側の寺院に放火する。その結果、両寺院ばかりか、全市が灰燼に帰し、アプデラ共和国は事実上崩壊する。このように、一方では平和の回復、他方では完全な消滅という際立った結末は、いったい何を示唆しているのだろうか。そもそも、アプデラ共和国は存続すべきだったのか、それとも滅亡すべきであったのか。「べき」というのは作者の見方や目的意識を反映する言葉だが、事件全体の流れの中に、いずれかの「べき」を探すことはできよう。まず、Wieland の小説がいわば平和的解決に向かった直接のきっかけは、問題のろばが、市の厩の職員の思い付きで人々の集まっている広場まで連れて来られたことで、まったくのアプデラ的偶然でしかない。かりにこの偶然がなければ、広場に詰めかけた、庶民を中心とする野次馬連中は、Agathyrus の代理人である弁護士 Polyphonus の口を通して、歯医者側の側に与する者は今後ヤーン寺院の生活補助が受けられないと脅かされていただけに、判決に苦渋する大評議会の面々を黙って見逃すはずはなく、おそらく、大乱闘や流血の惨事が起こったであろうことは想像に難くない。元々、人々は乱闘を覚悟して、棍棒や匕首などで武装していたし、「いざとなれば」という気持が、四百人の評議員全員に浸透していたのである。だから、広場の庶民たちがろばをめぐる大混乱を起こすと、たちまちパニックに陥った評議員たちは、全員が言い合わせたように、ひそかに隠し持っていた武器をとり出すのである。Wieland の言葉によれば、「お歴々はお互い相手を見合って少なからず驚いた、というのは、あっと言う間に、上は大法官から下は最下級の陪審員にいたるまで、一人残らず手に拔身を握っていたからである」（原書285ページ）。また広場の民衆が

哀れなろばに襲いかかった凄まじさも、人々の憤懣の大きさをよく物語っている。群衆は、あっと言う間にろばをちりぢりに引き裂き、一切れの肉、一枚の毛皮をめぐって殴り合い、掴み合い、ひっかき合いし、中には、その場で立ったまま、自分の手に入れたろばの身体の一片を血だらけになってむしゃむしゃ喰べる者もいたし、自分の手に掴んだろばの一切れを家へ持って帰えろうとする者は、まだ何も手に入れていない多くの人々に追い掛けられるといった有様であった。このような民衆のヒステリー状態から見ただけでも、アプデラ共和国が平和裡に存続すべき根拠をその内部に蔵していたとは、なかなか考えにくい。また、Dürrenmatt の結末となった放火にしても、その心理的根拠はすでに Wieland の原作の中にある。市議会における両派の論争中に、「ろば党」の一議員は激昂のあまり、相手方の言い分を認めるくらいなら、アプデラ全市が紅蓮の炎に包まれたほうがまだましだ、と口走っている。さらに、ラジオ・ドラマの中で、二人の消防班長が自分の党派を裏切って敵側の寺院の消火をすることはできないと言い張り、やがて全市が焔に包まれるというグロテスクな場面が出てくるが、このように自分の党派への忠誠を守るためには自己破壊も辞さないという態度は、やはり、原作の中にも見られる。アプデラ市民が「ろば党」か「影の党」のいずれかに与し、中立者が皆無になって、抗争が激烈になってくると、「影の党」の者は、たとえ、ほんの僅かであろうと、敵側のパン屋からパンを買うくらいなら、飢えて本物の幽霊になったほうがましだとさえ考えるようになる。因みに、「影 (Schatten)」が「本物の幽霊に (zum wirklichen Gespenst)」なるという文章を Helmut Arntzen は、Wieland の諷刺的文体の見事な例として挙げている。

このように原作自体の中にはアプデラの破滅を示唆する個所がいくつも見られ、Dürrenmatt が両派の放火という形でラジオ・ドラマの結末をつくりあげたことは、決して彼自身の新機軸とは言えない。従って、原作に描かれた事件の流れから見ても、アプデラは破滅への一途をたどっていたのであり、Wieland 自身が原作の冒頭で示唆しているように、運命の動きが違っておれば、この共和国が小説の第四巻で没落しても不思議はなかったのである。当然のことなが

ら、Dürrenmatt はこの第四巻のみを翻案したのであって、小説の第一、二、三、五巻はまったくラジオ・ドラマに関与しない部分であるから、第四巻の事件の流れがその内的必然性として持っている方向にのみ着目したものとされる。劇作家としての彼の目が捉えた内的必然性はアプデラの滅亡であり、Wieland のように偶然という一種の *Deus ex machina* を使用する理由がなかった。つまり、人間の争いの論理を完徹し、根拠のない介入を一切斥けたのである。小説家が回避した道を劇作家が直進したと言ってもよい。

ところで、争いの論理、すなわち、人間が党派を組んで敵対者を圧倒しようとする意志が目指す方向は、原作の場合も翻案の場合も同じであるが、それを押し進める力に関しては、両作品の間に時代的なニュアンスの違いがある。既に述べたように、Wieland の場合は宗教に毒された人間の行動が諷刺の対象であったが、Dürrenmatt では理念、理想に踊らされる人間の実態がそれであり、その意味では現代における宗教勢力の衰退を反映している。ラトナ寺院の司教とヤーゾン寺院の長老司祭がラジオ・ドラマの中に登場することは小説の場合と同じであるが、彼等の役割は、宗教の力を誇示することよりも、言行の不一致を露呈して批判の対象となり、宗教の形骸化、空洞化を自らの実例によって示すことにある。裁判の席上、両人の素行や政治的な暗躍ぶりが暴露されるのはそのためである。人々の心を支配するのは自由とか進歩、祖国とか伝統といった抽象的な理念に変化しており、登場人物の中で宗教によって動かされていると思える者は一人もいない。Anthrax が得意になって自慢する信仰心も形式的な見せかけでしかない。しかも人々のすがりつく、あるいは、そう見せかけている理念も、実態は自分のエゴを覆い隠す手段にすぎない。船長 Tiphys に500ドラクマを提供してラトナ寺院の焼打ちを頼む男は、口では自由のためと称しながら、後生大事に20000ドラクマの値がある真珠を抱えている。「聞いたかね、腹の中の焼酎君。自由が問題なのだよ。自由の問題があるときにゃ、放火もまったく楽しいもんだよ。俺たちゃ、なんと立派な目的に使われるというわけだ、焼酎君とこの俺がよ。フン、いつだってこういう具合だったのだ。どこの海岸でも、どこの港に入っても、どんな土地へ行っても、ど

んなお天道さまをおがんでも、いつもこんな調子さ。お前さんたちは理想が大事だし、俺のほうは焼酎が大事さ、それに女と黄金さ。だがよ、俺がいなきゃ理想だって何にもできやしない、俺の短刀が物を言わなきゃ、世の中で一番大切なものだって何の役にも立たないんだぜ」（原書166ページ）。これは Tiphys が理想を嘲ける言葉である。さらにヤーズン寺院への放火を頼みに来た男が、祖国のためにやるのだと告げると、Tiphys は同じ調子で「それも立派な理想だな。健全な理想だよ。これはいい商売になる。祖国、祖国って言われるおかげでこたま金が儲かるぜ…」（原書167ページ）と皮肉たっぷりに応答する。この飲んだくれの船長は、彼自身の言葉が語っているように、酒と女と金だけが生きる目的であって、それ以外には、いかなる理想をも追求めない。まさにこの没理想性が彼の理想批判に重みを加えているのである。彼の批判に耐え得るアプデラ人は存在しない。彼等はいずれも自ら犯した愚行の中に破滅してゆく。無頼の船長 Tiphys が彼等を裁き、彼等を罰する役割を果たしていることは、自由にせよ、祖国にせよ、現代の世界でもてはやされる理念や理想が、個人や団体のエゴ追求によって、中身の無いスローガンに貶められること示唆している。

このように見てくると、Dürrenmatt のラジオ・ドラマは題材の面では Wieland に負うとしても、登場人物のあり方は、むしろ現代人一般のそれであって、Wieland がその小説全体によって描きあげた特殊なアプデラ市民の像をはるかに乗り越えているようである。すなわち、小説では第一巻から第三巻まで、デモクリトス、ヒポクラテス、エウリピデスなど調和のとれた健全な人間像との対比において点描されたアプデラ人は、今日の通常の間人観から判断すれば、話の面白さを強調するためか、わざとらしさが強すぎ、戯画めいた感じがどうしても拭いきれない。第四巻ではその傾向がかなり改まり、アプデラ人もかなり普通の人間らしく振舞い始めるが、それでも、市民が完全に二派に分裂し、党派の所属が大問題になってくると、以前はどれほど熱心に言い寄っても一向に相手にされなかった求愛者が、恋人と同じ党派に入れば、たちまち愛をもって迎えられるという叙述などは、まだ戯画の域に属する。一方、ラジ

オ・ドラマの登場人物に関しては、熱狂的な党派を除くと、こうした不自然さがない。たしかに、ろばの影にこだわる歯医者とろば追いは、まさに奇矯なところを見せるが、これは話の発端としてやむを得ない。しかし、その他の点ではごく普通の人々である。裁判の席上で妻の不貞が暴露されると、歯医者は思わず「嘘だ、嘘だ、みんな嘘だ」と絶叫するし、娘を奴隷に売った後、さらに永年連れ添った妻まで前金を受取って女中奉公に出すことにした Anthrax も、いよいよ妻が出てゆくとなると涙を流すのである。要するに、ラジオ・ドラマの中の人物はごく普通の人間で、小説の中のアプデラ人のようにあまりにも戯画的な臭みがないため、アプデラの境界線を越えて通常の社会に生きている感じが強い。ここから、この作品が現代の人々に、賛否のほどは別としても、直接に、また具体的に働きかける可能性が生じる。従って、このラジオ・ドラマを聴く人は、発端の争いこそ荒唐無稽とは感じて、その後の事件の進行には素直についてゆけるのであろう。さもなければ、この作品が放送される度に大きな反響を呼び起こすはずはなかったと思われる。さて、一部の聴取者がこの作品に反発した理由を推測してみると、先に挙げた Elisabeth Brock-Sulzer の批評が示唆するように、Dürrenmatt が Tiohvs の口を借りて、人間の抱く理想は私利私欲を覆い隠す仮面にすぎないと主張したからではなからうか。あるいはまた、彼が Wieland のように読者を楽しませず、人間の弱さ（この場合、党派心や闘争心）を絶対的な悪として、仮借のない懲罰を加えた故だろうか。この問い掛けは、これまで故意に脇へ置いておいたもう一つの問題とつながる。すなわち、Wieland が『ろばの影裁判』に平和な結末を与えたのは何故か、またそれはいかなる手段によって可能となったのかという疑問である。

まず、彼がこの裁判事件を平和な形で終結させた理由は、言うまでもなく、小説を第四巻で終える積りがなく、更に書き続けようとしたからである。彼は『アプデラの人々』の最後をラトナの蛙と結びつけようとして計画していたらしく、先にも述べた通り、第四巻の冒頭でそれをほのめかしている。しかし、おそらくもっと重大な理由として考えられるのは、事件の流れに内在する必然性に屈

服するならば、彼の小説の方法ではほとんど第一義的な意味を持つ「語り手」（Erzähler）の構築が不可能とならざるを得ないからであろう。語り手は、もちろん、自分が語る事柄から離れるわけにはゆかないが、その事柄を任意に形象化する立場になれば、徒らに事柄に引きずりまわされるだけで、小説の有機的構造とはなり得ない。Wieland がドイツ文学の世界で始めて近代小説をつくり出したと評価される最大の理由は、まさにこの語り手の確立という点にあるのであって、たとえば『アプデラの人々』の場合、その特色は物語の内容そのものより、その語り方、語調、多様な角度からの対象の叙述、つまりは語り手の構築が成功した点に求められるのである。さらにまた、『ろばの影裁判』と題する第四巻は小説全体の一部分にすぎず、それだけを全体の構造の中から取り出して論ずることは、本来、邪道であり、事件の流れの方向も、単に第四巻のみで判断するだけでなく、全五巻にわたる小説全体の流れという一段高い観点からも捉えなければならない。従って、視点を第四巻に固定してしまえば、あるいは、ラジオ・ドラマに顕現する首尾一貫した事件の追求がより事柄の論理にかなったやり方かもしれないが、アプデラ共和国全体の諷刺というテーマに従えば、Wieland が一種の *deus ex machina* を用いても無理とは言えない。小説の第一巻から第三巻までに展開されたアプデラ社会のパノラマは、アプデラの人々がどれほど偏狭な、また度外れに単純な行動をしようとも、一種の善意は失っていないこと、自分自身を笑って自分の犯した過ちを乗り越える力の備わっていること、つまりは、自分の欠点を改めてゆく可能性のあることを示唆している。たとえば第三巻『アプデラ人に囲まれたエウリピデス』では、平常、俗悪きわまりない戯曲作品を趣味の怠惰から、あくびをしながら「傑作だ、大作だ」と言っていた市民たちが、エウリピデス本人の演出した『アンドロメダ』を見て、おそらくは生まれて初めて心底から感動したことが皮肉まじりに叙述されているが、これこそアプデラ人でも真に美しいものには、普通の間人と同様に心を開くという例証に他ならない。Wieland はこのようにアプデラ人の像にも評価すべき点があることをあらかじめ読者に示唆しておきながら、第四巻へ入ったのであるから、少なくとも読者（もちろん、小説構

成要素としての虚構の読者のことである)の側にアプデラ人の愚行に対するある程度の理解、寛容な微笑を期待できる立場にある。さらに大評議会における「ろば党」と「影の党」の対決の場面にも、あらかじめ大法官の作曲による音楽を演奏させるというやり方で、対決の雰囲気をも柔らげる効果を挙げている。これは説明を要するが、アプデラ人の音楽表現は、通常の間感からはとても考えられぬことだが、悲壮な場面では軽快で楽しい曲を、喜びの場面では沈痛で哀愁のこもった曲を演奏するといった倒錯した習慣があった。このため大法官が自派の闘志を掻き立て、勇気を鼓舞しようと目論んだ音楽演奏がまったく逆の効果をおこすことになったのである。一触即発とも言うべき殺気だった雰囲気がこの音楽によって、その毒気を奪われ、人々はなんとなくおかしさを感じ始めるのである。さらに、大法官が評議会を主宰するため会場に姿を現すが、その伴をしている民兵の様子が次のように描き出される。「やっとのことで大法官が護衛を連れて姿を現わしたが、その護衛役をやっているのは、哀れな、やせこけて貧弱な体格をした職人たちで、矛先の鈍くなったほこ槍とすっかり錆びついた、いとも平和な剣で武装していた。これはまあどう見ても、法廷を守って賤民たちに威厳と恐怖を感じさせる戦士というよりは、庭に立って鳥を追っているほうがふさわしい連中であつた」(原書264ページ)。以上のようなやり方で「語り手」を駆使しながら、Wielandは大評議会の成り行きいかんと見守っている群衆の気分を柔らげ、さらに弁護士 Polyphonus の口を通して貧困な人々の軽挙妄動を抑止する。このような準備の上でいよいよ市の厩の世話役がふと思いつくという偶然を導入する。とすると、偶然は単なる偶然ではなく、周到に用意された意識的な方法によっていることが明らかになる。またしても語り手の存在が事件の流れを変えたり、速度をゆるやかにしたり、事柄との間に距離を置くことを可能としている。言ってみれば、Wielandは語り手を使いながら、高所に立って話の全体を見通し、アプデラ人を相手に楽しく遊んでいるのである。彼はこの遊戯を任意に延長も短縮もできるし、任意の形を与えることもできる。語り手の仲介さえあれば、事柄はどのようにでも処理し得るわけだから、Sündenbockならぬ Sündenesel を登場させて話のけり



をつけても一向に構わない。哀れなろばが犠牲になって（動物愛護協会の非難は必至であろうが）、評議會の人々は一人残らず「あの『イリアス』第一巻の神々のように果てることない高笑いの声を挙げる」（原書286ページ）のである。Wieland は啓蒙主義時代の楽観的な人間観一人間は教育万能であり、自己を向上させる能力があるという考え方から、『ろばの影裁判』における破局を回避した。しかし、それは同時に彼の生きた18世紀の限界を示している。人間の諸問題は人間として処理可能な範囲内に押しとどめ、人間の知的、道徳的可能性を越えるような存在の深淵はのぞきこまないというやり方は、おそらく現代の人間の受け容れるところではないだろう。言い換えると、語り手による事柄の操作は、いかに軽快で楽しい遊びではあっても、もはや現代の人間認識とは相容れないものであろう。

Dürrenmatt が争いの論理を完徹させたのは、一つには彼の人間観によるものであろうが、ラジオ・ドラマのように短時間に一つのテーマを追求するジャンルでは、各発言者の視点を傍から注釈するのは、妨害にこそなれ、事件の形成には役立たないから、あらかじめゴールを決めておいて、その線に添って発言者を配置したため、争いがそれ自体で決着をつけたという印象が生ずるのであろう。ともあれ、彼は人間の争いが愚であると断定したのである。争いの名目は所詮虚妄だと言い切るのである。「この話の中では、私が本当いろばだったのでしょうか」（原書172ページ）と群集に追われているろばが人間に問い掛けてこのラジオ・ドラマは終る。Dürrenmatt の翻案は Wieland の小説が文体の衣で覆い隠していた関係を白日のもとに引き出した、つまり事件そのものが語り手の干渉を斥けて自立したのである。事件はまさにその汚ならしい全身を隠すところなく読者の面前に曝け出している。それを見て正体が明らかになったと満足する者も、やはり衣をつけているほうが我慢しやすいと目をそむける者もいる。このラジオ・ドラマを聴いた人々の反応は、裸がよいか、衣裳をつけているほうがよいかという判断でまってくる。その限りでは、原作と翻案をへだてる170年は人間の存在感覚を本質的に変革しなかったと言える。なぜなら、いつの時代でも同一の事柄について、明言されるほうがよいとする

人もおれば、やはり受取りやすい形のほうがよいとする人もいるからである。

#### 用 書

- Friedrich Dürrenmatt: Der Prozeß um des Esels Schatten. In: Friedrich Dürrenmatt Werkausgabe in dreißig Bänden. Diogenes Verlag AG Zürich, 1980.
- Christoph Martin Wieland: Geschichte der Abderiten. In: Wielands Werke in vier Bänden. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1967.

#### 参 考 文 献

- Fritz Martini: Wieland•Geschichte der Abderiten. In: Der deutsche Roman. Herausgegeben von Benno von Wiese. August Bagel Verlag Düsseldorf 1963.
- Helmut Arntzen: Satirischer Stil bei Robert Musil H. Bouvier u. Co. Verlag-Bonn 1960.
- Elisabeth Brock-Sulzer: Die Hörspiele. In: Über Friedrich Dürrenmatt. Werkausgabe in dreißig Bänden. Diogenes Verlag AG Zürich 1980.